

臓器移植患者の 心と身体——生体腎移植患者 の語りから

出口顯

Dejichi Arita

臓器移植において、他の人工物の移植と大きく異なるのは、ドナーの人格のイメージがさまざまなレベルで影響を与えることである。ここでは従来、あまり取り上げられることのなかった生体腎移植患者の移植後の自己のアイデンティティーについて取り上げる。

かもしれない。

近年では、移植され

記憶する心臓

角膜移植を受けて視力を回復した女性が、角膜提供者の生前に見たものを見るようになるホラー映画がインドで公開され、眼科医らが「提供者や患者がおびえてしまう」と上映禁止を求める訴えを裁判所に起こしたというニュースが、今年五月の新聞で紹介されていた(『山陰中央新報』五月二十四日)。眼科医は「移植を待っている人がたくさんいるのに、誤解を助長してしまおう」とかんかんだったということだが、提供者が見たものを患者が幻として見るようになるというのは、既に手塚治虫が漫画『ブラックジャック』の一エピソードとして描いている(第一巻「春一番」)。

このホラー映画が『ブラックジャック』からアイデアを借用したかは定かではないが、人々の想像力のレベルでは、角膜や臓器の移植は、単に身体部分の移植にとどまらず、提供者の記憶の移植であるかのように受け止められているといえる

の記憶が患者の中で蘇^{よみがえ}ったり、移植手術を機に提供者の食べ物の嗜好^{嗜好}や行動パターンを受け継いだかのように自分の性格や行動が大きく変化したという心臓移植患者自身の体験談が、テレビや書物で紹介されることがある。一九八八年に心臓と肺を同時移植したアメリカ人女性クレア・シルヴィアの『記憶する心臓』(翻訳は角川書店刊)は、その代表例ともいえるだろう。彼女は以前好きではなかったフライドチキンやビールを無性に食べた

り飲みたくなったりしただけでなく、夢で仲良く会話をしたティムという若者がドナーだと確信し、ついに彼の遺族をつきとめるのである。医学者によつてはこのような体験を「細胞記憶」と呼び、科学的に立証しようとする者もいるが、まだ初歩的な仮説の域にも達していないのが現状である。

しかし科学的な客観性はともかく、移植患者自身にとって、心臓移植が自己の著しい変容を伴うままなまじい体験であることは否定できない。

テレビなどのメディアでは、いささか極端な事

『記憶する心臓』クレア・シルヴィア&ウィリアム・ノヴァック 飛田野裕子訳 角川書店 1998

『ブラックジャック』1「春一番」手塚治虫 秋田書店より

例が紹介されがちだが、臓器移植した患者の中には、提供者の心が自分の中に現われるということはないにせよ、移植を機に「自分の中に他人がいる」という思いにとらわれたり、「自分とは何か」をあらためて問いかける人たちがいる。以下では、自分の家族から腎臓^{じんぞう}を提供してもらった二人の生体腎移植患者の体験を、その語り即ち紹介したい。なお以下の語りはお二人とのメールのやりとりに基づくものである。

排尿における他者の存在

三〇代の男性であるUさんが透析^{てんし}を導入したのが一九九一年で、二四歳のときだった。その後十年間透析を続けたが、二次性副甲状腺機能亢進症^{しよじょう}(副甲状腺ホルモンがたくさん分泌され続ける病^{びょう}気)や高血圧など透析のさまざまな合併症から

将来に絶望感を持ち、腎移植を決意した。透析導入時に母親が腎臓提供の意思を既に示してくれていたこともあり、母親から同意をえた後、二〇〇一年生体腎移植を受けた。母親は六七歳だった。

Uさんは「私が母から腎臓を提供してもらい生体腎移植を行なったとき、自分では母の腎臓が自分に同化するイメージを持つことで、拒絶反応が出ないようにと願っていた」。その一方で、他者、つまり自分ではないものの存在を身体レベルで実感することがあったという。それは尿をするときで、移植する前一〇年以上尿が出ない経験から、「尿が出ることは自分自身ではない状態であり、そこには他者のものが機能していると感ずってしまう」。

健常者にはあたりまえの排尿も、Uさんには単なる生理現象ではなかったのである。Uさんが実感する他者とは彼の母親である。「腎臓提供を申し出た母の意思と愛情によって身体は尿をだせるようになった」。Uさんにとって排尿は自分の中に母がいるという感覚を呼び覚ましてくれる身体現象なのである。

最近はこちらの感覚はあまりなく、「今では尿が出るというより尿を出すという感覚になっている」という。排尿に感じる他者の存在という受け止め方に変化が生じているのである。Uさんはその変化を彼なりに解釈してくれた。「移植腎臓に『なんだ』ということもあるし、また、一〇年間尿が出なくて、膀胱の筋肉が弱っていたのが、だんだんと筋肉がついてきて自分の思うようになったということが大きいのではないだろうか」。

しかし、腎臓そのものについては、「半永久的に母の腎臓という感覚はなくならないでしょう。それは精神的なものもあるでしょうが、一番に感じ

る事は腎臓の位置だと思えます。移植腎の位置が元々の腎臓の位置になく、お腹に近い表皮に近い部分に移植されている（通常でも体感として感じる位置にある）ことが大きいのではと考えています」ということだった。

移植腎臓Ⅱ 独立した存在

Mさんという女性は、一九八〇年七月九歳のときから二二年間透析を受け続けてきた。この間に彼女の姉から腎臓提供の話が持ちかけられたが、五年以上も移植に踏み切れなかった。また献腎移植（心臓死した匿名のドナーからの移植）にも登録していなかった。

「生きていくために他人の臓器までもらっているのだろうか、そこまでして生きる資格、権利はあるのだろうか、他人の臓器を自分の身体の中に入れる不安、不快感などいろいろなことを考えると手術の決心がつかなかった。しかし長期透析により自分の身体の限界が近づいているのが分り、その恐怖には勝てず移植に踏み切った」。移植手術は二〇〇二年六月のことで、提供者は姉だった。

MさんはUさんのように、尿が出ることで自分でないものがあるという感覚は持っていない。しかし彼女も、自分の身体は移植後も変わらず自分だけの身体だと感じているわけではない。

彼女は手術した日がくると、誕生日の歌を「複雑な思い」で歌った。「ハッピーバースデー、ディア○○」の人の名前がくる箇所などと歌えばいいかわからず、そこだけ鼻歌になってしまうという。彼女の名前でも彼女の姉の名前でもしっくりこない。しいていえば移植された腎臓ということになるだろうか。

「姉の身体から取り出された腎臓は、一度はそ

の時点で死んで、私の身体の中であらたに生きたという思いがあるような、提供された姉の腎臓には姉とも私とも違う命があるような感じなのかもしれない」。姉の身体の臓器だったものが、移植により別のものに、命というか人格といつてもいいような意思を持った何かに変ったような、そんな奇妙な感覚がある」。

「提供された姉の腎臓が（本当に）人格を持っていてるなどとは思っていないし、自分の目や肺などの臓器や器官に人格を感じることはないし、持たそうとも思っていないが、提供された腎臓に感じる何かを考えると時には、人格を臓器にもつてもらうとわかりやすくなるというか落ち着くような気がする」。移植腎は、Uさんとは違った意味で彼女にとって他者と化しているといえよう。Uさんの場合は移植腎Ⅱ彼の母であったが、Mさんの場合は、自分でも姉でもない存在に移植腎がなっているのである。この他者にどう対処すればよいかわからず困惑した時期が彼女にはあった。

移植後一年が過ぎるまでは不安が大きすぎたが、次第に腎臓が機能して透析から離れることができたことを実感としてもてるようになり、喜びが大きくなってきた。しかし不安を全く感じなくなったというのではなく、「不安と喜びの比率が大きく変わってきたということだと思う」。そしてこ

ドナーカード（長崎県腎臓バンク作成）



ドナーカード（スウェーデン）



COLUMN コラム

の頃から「喜びが実感できると逆にだんだんと腎臓に良くない行動が増えてきた。提供された腎臓を大切に思っているが、週に何度も夜遊びをして、くたくたになっているのに休もうとせず、無

茶を繰り返したり、移植された腎臓には水分が多く必要なのにあまりとらなかつたり、免疫抑制剤めんえきよくせいざいの服用もルーズになってきた。わざとしたというのではないのかもしれないが、大切にできないわ

けでもないのに大切にしていない自分がいる。自分の中に自分ではない物モノがいて、そのおかげで生きているのにもかわらわず、なぜか大切にできないような」。彼女は、無意識の中で移植腎を排除したい気持ちがあるのではないかと、自分のこの行動を分析している。

もちろん彼女は、透析から離脱することができた幸福感や喜びを感じており、それは、腎臓を移植された今の自分を肯定していることでもある。しかしその一方で「生身なまみの私では生きていくことはできない、でもその生きていくことのできない自分が本当の自分ではないか」という思いもあるのだ。

透析から解放された自分は自分であって自分ではないのではないか、腎臓を移植された自分はどこまで本当の自分なのか、移植腎は自分の中にある他者ではないかというアイデンティティをめぐる問いがMさんの行動には潜んでいたのがある。

しかし生きていくことのできない自分が本当の自分だと断言することにも彼女は葛藤を感じている。なぜならそう思うことは、腎臓を提供してくれた姉やこれまで自分を支えてくれた家族や周囲の人たちにとってきわめて失礼だからであり、彼らに混乱、落胆を招くに違いないからである。「それは私にとってはすごい恐怖だ」。彼女のこの怖れから、自己とは何かとは、周囲の他者との関係を配慮せず自分自身だけの内部で決められるものではないことがわかる。だからアイデンティティの変容は、同時に周囲の他者との関係の変容を伴うこともある。Mさんの場合、移植後、姉に対する言葉遣いがいままでとは違った時期があったという。

「彼女は移植してからよく姉を「おねえしゅまゐ」

などと呼んでいたそうだ。「三三歳で使う言葉ではなく、幼稚化したみたいだが、なぜかそのように呼び、子供言葉を使うことが多くあった。姉には気持ち悪いといわれたが、母の血と肉から私ができたように、姉の腎臓が私の一部となっていることで、どこか姉を母と感じてしまう面があったのかもしれない。姉は移植手術後、麻酔から目覚めたとき真っ先に私はどうなったかとたずねたそうだ。妊婦は出産したとき、真っ先に我が子のことを気にかけてと思う。出産と移植は全く違うものだと思うが、苦しい思いをして何かを生み出すようなところでは同じような面があるのではないだろうか。

つまり妊婦が子供を生むように、姉は腎臓提供であらたな彼女を生んだと彼女は想像したのである。提供された腎臓を介して、彼女と姉は、赤ん坊と母親のように、分ちがたく結びついており、彼女の生は彼女の姉によって支えられているということなのだろう。

現在はこうした言葉づかいほとんどなくなつたそうだ。姉から自立・独立し始めたということなのかもしれない。しかしこの自立は、腎臓が独立した人格をもっているように感じることで、可能になったのかもしれないとMさんは考えてもいる。

臓器移植の あまり語られないこと

一九九七年に脳死・臓器移植法が成立して八年が過ぎ、今年に入ってから法改正に向けて、さまざまな議論がなされていることは新聞などでも紹介されている。しかし脳死判定の難しさや提供の自己決定権などは、盛んに取り上げられるが、そ

の反面、提供に同意したドナー遺族が、移植が終わってしばらくした後どういった心境にいるかなどは、正面からクローズアップして取り上げられてはいない。また臓器移植という提供者は脳死者ばかり強調されがちだが、腎臓の場合、心臓死した人からも生きた人からも提供してもらうことが可能なことは、しばしば忘れられがちではないだろうか。つまり現在の日本での臓器移植をめぐる議論はいささか偏りがちで、見落とされていることが少なくないのである。ここで紹介してきた、脳死移植ではなく生体腎移植患者の、移植後の自分の身体の捉え方も含めた「自分とは何か」というアイデンティティをめぐる思いも、その一つである。

しかし一口に生体腎移植患者と言っても、移植前の透析歴や病歴などによって、患者一人一人その思いは異なるし、また同じ人の中でも時間の経過とともにそれは変化していく。Uさんの場合、完全ではないにせよ、自分の中に入ってきた他者と今のところはうまく折り合いをつけているように見える。しかしそのかわら、移植後服用する複数の免疫抑制剤の副作用で、一日四、五回トイレにいかなければならないほどの下痢の症状が続いている。「逆に透析中は体の水分を除去するために便秘になりやすかったのですが。また毎晩のように頭痛もあるという。

対照的にMさんの場合、姉との組織適合検査で

ドナー登録のパンフレット(アメリカ・デラウェア)

もミスマッチがなかったのに、免疫抑制剤の量はUさんほどではなく、副作用も深刻ではない。しかし彼女は透析期間が長かったため、移植して健康になったことを喜びながらも、透析を受け続けてきた自分を否定したくない気持ち(生身(素)の私では生きていくことはできない、でも生きていくことのできない自分が本当の自分ではないか)があり、それが彼女に、移植後の自分とは何なのかという問いかけを、他者との関係の変化も巻き込みつつさまざまな側面から投げかけさせているように見える。ここでは紹介できなかったが、この問いかけは、今でも違った角度から彼女の中で繰り返されている。

おそらく、生体腎移植患者の自己とは何かというアイデンティティをめぐる問いかけは、一つとして同じものなどないだろう。このような体験を前にして私たちがすべきことは、それらを安易に一般化・抽象化して、よくありがちな生命倫理の問題に回収することも、ましてや日本人独自の身体観や死生観を論ずることでもない。そうではなく、生活の場において、当事者(移植ということなら患者だけではなくドナーとその遺族も含む)ひとりひとりが、周囲の人との関係を紡ぎながらどのような体験をしてきたのか、そのことに十分配慮した倫理(いかにふるまうかの指針)を模索することが必要なのである。

本誌はカラーです。また凶写真は著作権の関係上、掲載していません。